



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

三つの対処法

人間関係の対処法には愛、正義、権力の三つ…三つしかないと言っべきかがある。同じ人間に接するにも、愛情を示すか、正義にのっとり正面から向かうか、権力をもって支配するかどれも可能だ。

愛の基本は相手の長所を探すこと

正義の基本は相手の権利を尊重すること。

権力の基本は相手を動かすこと。

何世紀もの間、思想家や心の教えを説く人々は、愛と正義こそが人間の本質であると唱えてきた。だが今や、支配欲に押されている。

愛には、慈悲、寛容、哀れみ、許し、友情といった感情がすべて含まれる。愛情は親しい者どうしの間に芽生える。

正義には、自分自身及び他者の権利を擁護する法律、慣習、モラルが含まれる。正義は知人はもちろん、見ず知らずの相手との間でも成立しつる。要するに、格言にある「人を傷つけないなかれ」の精神だ。

権力とは相手を支配する、もしくは危害を加えるための力で、敵に対して用いる。中絶によって死んでしまう胎児、その背景にあるのは愛？正義？それとも権力？

人間は、愛情と正義心を完全に捨て切れるものではない。相手が目に見えないからと、建前の愛と正義の仮面をつけて中絶の理由に利用している。

愛の仮面とは？望まれない子を産むのはよくない。障害をもって生まれるかもしれないし、何よりか

わいそつだ」と言う。しかし、本当に子どもを愛していたら殺すなどできないはずだ。

正義の仮面とは？この子が生まれたら、家庭が、婚約者との関係がめっちゃめっちゃになる、両親がシヨックをうけるだろう、学業の妨げになる、仕事に支障をきたす。子どもは勝手にしのびこんだ邪魔者、自分の方が大事だ。しかし、正義の大原則は、他人を傷つけないことではなかったか。命にかかわる危機でもない限り、殺すなどもつてのほかだ。たかが子どもひとりのために仕事に支障が出るといふなら、昇進するために上司を撃ち殺すのも正しいことになつてしまふ。

今日、この仮面が現実の本当の姿となつている。「必要があつての中絶、詫びることなどない」と臆面もなく主張している。人の命を奪つという究極の決

断には、正義や愛の観念をなくさない限り行きつかないはずである。主張を正当化する相当の理由があるのだから、中絶の「権利」を掲げる人達は、ひとりよがりにより正しいと決めつけてしまつていてる。

人間のあり方の基本を権力におきたくない。お互いが敵ではない、連帯感こそが人間らしい。そのためには、権力で覆われた人々の仮面をはがしていかねばならぬ。自分さえよければではなく、他の人も思いやるのが愛。自分の利益のみならず、生きるという人間の基本的権利をまもるのが正義。罪なき子どもが死んでいくのを黙ってみているのは寛容という名の罪。権力は人間の尊厳まで踏みいることはできない。

医学的道德の退化

この前、妻が、「あなた

と技術を守る……」

とです。私達の社会が、道

が医学校を卒業する時に、

ヒポクラテスが書き物を完成させたのは、紀元前

徳の相対主義や「場合に

る様に言われた？」と聞き

三百五十年より前と推定

よって異なる道德」と言わ

ました。こう聞かれた時、

ヒポクラテスの宣誓を見て

れる様に、医学上の道德

て見た事もない、と気付き

に、特に中絶と自殺に手を

は、「医者と患者とのプラ

ました。医学生の時にも、

卒業後の医者としての十

り、もし医者と患者が、あ

二年間にも。興味がわいた

て忠告しているのが、面白

いと思ひました。ヒポクラ

ので、子ども達の百科事典

テスは、医者達が人の命を

終わらせるのに一役買う

の「H」の巻を見て調べて

事により、道德的に崩れる

かもしれない、と恐れたの

みました。私は、その宣誓

でしようか？もしそうなら、

彼等にそうであれば。

が結構短くて、七行しかないのに驚きました。更に驚

いたのは、その内の一行の内容です：

この新しい道德観念は、

「私は、例え頼まれても、

命を絶つ薬を誰にも与えないし、その効果について

の為に、道德の世界的な規

の提言もしない。同じく、

女性に中絶の医療を与えない。けがれない精神と神

聖をもって、私は自分の命

す。又、現代の医者は、難しい道德の問題に直面した時、自分達になつた限度を定めてもいい、とも言われています。

我々が實際坂を滑り落ちたのを否定出来ずか？一九九〇年代になると、移植の為に胎児の組織を採集し、医者が新しい生命を作り出す為に中絶された女の胎児の卵巣を集める、という事があるのを誰が考えたでしょうか？ケ

しかし、時として、現代の医学上の道德には限度が無い様に見えます。全く、医学の研究や技術の焦点は、人類を援助したいという純粹な願ひよりも、学問的な研究の方に走っているように思えます。この様な研究が独走してしまふと、考えられなかつた事も、あつという間に当り前の事になつてしまふので

たでしょうか？もし自殺の手助けが合法化されたら、それは私達に、更なるジレンマをもたらすだけです。壊れた人間関係や薬物乱用の問題への、感情的な怒りによつて、自殺の手助けを望むティーンエイジャーはどうですか？彼や彼女の苦しみは、癌患者のそれより少ないと言えますか？誰が、「分別のある」と「分別のない」自殺への考えの違いを見分け、誰が、自身で話せない、昏睡状態だつたり精神異常のある

中絶が合法化された時、何人かの道德家達は、すべての人間の命を軽んじる事につながる滑りやすい坂に我々は足を踏み出し

た。中絶の権利を主張する人々は、この懸念をあざ笑ひ、彼等の新しい「選択の権利」を祝いました。でも、今振り返って見て、誰が、

代の薬品や医療の技術が、とてつもなく複雑になりつつあるので、ヒポクラテスの宣誓は古臭くて、もう通用しない、という事で

対の道德の手引きの存在を否定する傾向にありま

患者の替わりに、話すとい
うのでしょうか？

私達は滑りやすい坂の
下まで、ほとんど来ていま
す。あるのは、不本意な安
楽死だけです。患者の承諾
のない安楽死。これは二十
年前に、医者による自殺の
手助けが合法化されたオ
ランダでは、すでに現実と
なっているのです。オラン
ダでは、「死ぬ権利」が「死
ぬ義務」となってきたとい
て、治療を受けに病院へ行
くのを、お年寄りたちは怖
がっていると言われています。
ます。本来の自発的安楽死
の法律にのっとった、複雑
な規制や加護手段がある
のにもかかわらずこうい
う事が起きるのです。

社会が医者達に命を終
わらせる力を認めるにつ
れ、彼等は命を造る事に、
更に力を得てきました。初
めはそれが「試験管」ベ
ビーの受精の分野での進
歩につながりました。今私
達は、冷凍された人間の胎

児や、月経閉止後の妊娠

や、人間の胎児の無性生殖

という、切迫した前途に直

面しています。明らかに、

神は唯一の「命の造り主」

でなくなりました。医者達

が医学のこの分野で、社会

によるほんの少しの規制

しかなく、やりたい様に

やっているのが心配です。

彼等が勇敢にも新しい世

界の一つ一つの領域に踏

み込む度に、その問題にお

いての「討議の場」を開い

たとお互いに祝うのです。

ある有名な医学雑誌が、

「二十一世紀型ヒポクラテ

スの宣誓」というのを発行

しました。この宣誓には、

妊娠中絶や安楽死につい

ての特別な言及はありません

で行いましたが、次のような

は、常に人間の命に最高の

敬意を払い、命を終わらせ

るのは、ある場合では間

違っており、ある場合では
許されるという事、他の
人々のこの上ない愛を忘

れません。」

我々は、自分達の道徳感

によって行動してしまし

た。今では行動によって道

徳が決められます。そうす

る事によって時には、何世

紀もの間つちかかってきた

道徳道義を、私達は放棄す

る事になります。ヒポクラ

テスは、彼の宣誓をこの忘

れられない一行で終わら

せています：

「もし私がこの宣誓を

守り、犯さなかったら、私

は人生と芸術を楽しむの

を認められ、いつまでも皆

の中で名声を受け、尊敬さ

れるだろう。もし私がそれ

を破り、誤った宣誓をした

ら、これのすべて反対が私

の運命になるだろう。」

ケネス・キムキック

M.D.

父親か傍観者か？

中絶の多くは母親とそ
の赤ん坊のことを扱って
なってしまうのではない
います。では、その赤ん坊
の父親はどうしたので
しょう？父親が自分のま
だ生まれ来ぬ赤ん坊に同
じだけの権利を持つてい
ることを我々は確かに
知っています。

しかしながら我々はあ
まり父親の事を語らず、そ
れ故父親の痛みと悲しみ、
そしてその望みとを知ら
ずにいるのです。一般で言
われていることは反対
に、全ての男性が芯まで
腐っているわけではない
のです。しかし、中絶賛成
派が長い間、父親を無視し
続けてきたように、私達も
そうしなければ、我々も男
性を中傷し軽蔑する不協
和音に参加する事になっ
てしまうのです。そしても
はや赤ちゃんを作るため
にも男性は必要でなく

Celebrate Life 7-8/94

身体を

支配する(一)

「中絶は女性が自分の身体を管理するための権利である。」この言葉は、まだ産まれていない子どもの身体を無視している。(中絶には三番目の身体も含まれている。中絶担当医師である。)なかでも、中絶によって最も影響を受けるのは子どもの身体だ。彼または彼女の身体は完全に壊されてしまつた。

身体が「支配」され得る他の場合のことも見てみよう。(1) お金を稼ぐために性交をする時、売春婦は、自分の身体を支配している。(2) 薬の乱用者は、「コカインや他の薬を投与する時、自分の身体を支配している」。

これらの例では、身体は不当な方法で「支配」され

ている。中絶とは異なつていても、第一に影響を受ける身体は支配される人間の身体だ。だからといって、罪のない他の人間は犠牲にされてはならない。

ここに、罪のない人間が犠牲となつている。支配された人間の身体「の例がある。(1) 狙撃兵は引き金を引く時、身体を支配している」。(2) 子どもに異常な性欲を抱いている人は、子どもにいたずらをする時、自分の身体を支配している」。(3) 強姦者は女性に暴行する時、自分の身体を支配している」。

これらの例では、「身体を管理すること」は他の人の身体を殺したり襲つたりという根本的な影響を持つている。中絶についても同じことが言える。次のことに注目しなさい。人間「支配すること」、例えば狙撃兵は、妊婦というよりもむしろ中絶担当医師に似ている。なぜなら担当医師

は、女性の要求ではあるが中絶という実際の殺しを行うからだ。

では、中絶によって女性はこのように自分の身体を支配するのだろうか。女性が中絶を選ぶ時、彼女はお金を払い、中絶担当医師が彼女の子宮に入りその中に存在している子どもを殺すのを許すことによつて自分の身体を支配するのである。医師の唯一の目的は、母親が産みたくない子どもを殺すことである。人々が自分たちの「身体を支配」できる、明らかに非合法で不道徳な方法がたくさんある。人々は「自分の身体を支配する」事が出来るので、良い目的というよりもむしろ悪い目的のために「自分の身体を支配」している。そう言う訳で法律が必要である。産まれていない赤ん坊には、こうした人々から自分たちを守ってくれる法律が必要不可欠なのである。

生への二回のまばたき

「かけがえのない一つの生命を、あらゆる手段でできるだけ長く延ばしたかったのだ」

深夜、医師から連絡を受けて駆けつけると病院は真つ暗だった。みんな帰つた後で、来客は母と私達子ども三人のみ。四人で危篤患者を見舞つた。ベッドの上で苦しそうに息をしている父。酸素マスクから絶え間なくもれるシューシュー音が、助かる望み以上に絶望感を物語っている。ガンは血液感染にまで進行していた。

医師からの電話は、最新の血液検査の結果報告だった。前回の検査後、期待してきたかすかな望みも絶望的だという。回復と呼べるほどの兆しは見当たらず、むしろ容体は下降線をたどっている。治療をやめれば、激痛と闘う日々

から間もなく解放されるだろうと。しかし、家族としては諦めきれない。神を信じる私達は、もう話すことはできないその人にも魂が宿っていると知っていた。それに、兄と私は医療に関する職業訓練を受けたことがある。治療を続けるかどうかの選択に直面した私達は、クリスチャンとして生命維持を拒む考え方には賛同できない。

完全治療を依頼した。完全治療とは通気装置、俗に言う生命維持装置の使用を意味する。最新技術を駆使したこのポンプで、空気を父の肺に送り込む。体内の化学作用や体調が良くなり、生き延びる確立も高まる。

だがこの治療により、癌の激痛が何週間も患者を襲うことが予想される。「死んだ方がましかもしれませぬ」と医師。通気装置の使用は、倫理的にも感情的にも『辛すぎる』と言うのだ。

私は「家族にしてみれば、治療をやめることの方が倫理的にも感情的にも辛い」と答えた。医師は乗り気ではなかったが、法的にもしきたり上も、決定権は私達にある。しぶしぶ私達の申し出を受け入れてくれた。

看護婦も私達の判断には反対で、気温とはうらはらに、病室には冷たい空気が漂った。彼女達はつまらなそうな顔でベッドを病室から、この先治療を行う集中治療室へと移動させた。

父が装置に移される間、心中穏やかでなく、自分たちの意志を無理やり押し通した罪悪感におそわれ

た。医師による装置の取り扱い上の注意は、私達にどれだけ勇気が残っているか確かめるためだったらしい。私達は犯罪者のようにこそ治療室を出、裏階段を降りて閑散とした廊下を通って病院を後にした。背後にガチャツと鍵の閉まる音を感じながら、寒々とした夜の道を歩いた。愛する父が必要としなくなった日用品を車に積み、思う存分泣ける寒い家へと向かった。

翌日、父は家から二時間十五分かかる大きな医療施設へ救急車で運ばれた。まずは安心した。すべてが新しく専門的なのだ。資格をもつ看護婦が、患者のひげそりまでしてくれる。他の病院では考えられないことだ。

けれども、ひげそりで癌が治るわけでない。父の容体が悪化した。通気装置から外そうとあらゆる手を尽くしたが失敗に終わっ

た。血液検査も病状の進行を示している。意識がある時は、痛みが和らいだなど意思表示をしていた父も、最近では反応すら見せてくれないことがある。

大病院のベテランの先生方は、奇跡以外のことなら何でもやってくれる。しかし今回ばかりは奇跡を待つしかなさそうだ。間もなく彼らも、州立病院の医師と同じことを言い出すだろう。諦めて死なせてあげないと。

私達の決意は、どんな試練も乗り越えられる強いものだったが、そろそろ自分たちの胸に聞いてみる必要がある。

病院側にも我々の意志を問われた。薬の力でも除去されない悪物に脳を冒されながら生きる父を尊厳あると見るなら、尊厳のもとに死なせることをどうして否定できよう？

葛藤が生じた。父は昏睡状態を本当に望んでいな

いのだろうか？ 血圧が危険なほど下がった場合、集中治療をやめた方が賢明だろう。もし心臓が止まったら、心肺機能の蘇生を停止するのが最善策なのか？

ついに、対処法を考える会合が開かれた。私達にとっては気乗りのしない、母にしてみれば試練しか言いようのない会合である。「裁判」は病院の会議室で行われた。真ん中が空いた大きなテーブルを囲んで着席した。片側に並んだ生倫理諮問委員は、医師、ソーシャルワーカー、牧師、哲学博士の資格をもつ生倫理学者、それぞれ一名からなる。病院側を代表して医師二名と看護婦一名、家族を代表して患者の妻、娘、息子の私達が立ち会った。

医療の専門家は父の余命は死に向かっていると見ている。難しいのは死の理由である。胃に食物を運

ぶ管を無意識に外しているという事実から、父が死を望んでいると見なし、延命は重荷である、静かに死なせてやりたいと病院側は言う。

私達は、末期症状であると告げられた時、父が医師に向かつて言った言葉で「きただけ長く生きさせてください」を何度も繰り返した。父のモットーが「諦めるな、死を口にするな」だったとも再三強調した。治療をやめるのは患者を殺すのと同じである。かけがえのない命ができるだけ長く続くようにあらゆる手を尽くしてほしいと訴えた。

会合後、医師と私達だけで話し合った。父の心臓が止まったら蘇生をはかるべきか母のほうがかたくななのか、それとも私が後押しをしているのか？ など。治療の点では最後まで譲らなかった。

その夜、私達は怒り、傷

ついで病院を後にした。父が死にたがっている、家族が分裂しているなどの指摘が実に腹立たしい。助けてもらいたいと思っっている人々の敵意を目の当たりにし、私達は車に乗り込み、家までの長い帰路についた。

臓が止まったら心肺機能が蘇生を望みますか？」残っている腎臓がやられたら、人工臓器に替えますか？」さらに「命を大事にしたいですか？」どの質問にも、父はまばたき二回で答えた。

Celebrate Life 3-4/95

しかし、この問題は父自身が解決してくれた。生倫理会議の直後、医師が薬を変えたために父の意識がはっきりした。呼吸装置のせいで話すことはできず、もう書く力もないほど弱っていたが、まばたきで意思表示ができた。職員が父と直接やりとりをした。私はその場にいなかった。一語一句正確には伝えられないが、次のようなやりとりが行われたそう。父は「ノー」の時はまばたき一回、「イエス」ならまばたき二回で答えた。父の答えが首尾一貫していたため、医師は懸案の質問を投げかけた。「もし心

子どもを愛するには、まず母親を愛する事

「胎内の子どもを守るといふのは、母親を守る事に
よって自然に出来る副産物です。」

命を守りたいと思う社会の一員として、私達は次の明白な事実を伝えなければなりません：母親を助ける事なくして子どもを助ける事は出来ないという事です。

母親とその子どもとの密接なつながりは、私達の神が造られた道理の一部です。だから、胎内の子どもを守るのは、母親を守る事による、自然な副産物なのです。これは絶対に真実です。結局、神が造られた物の中で、胎内の子どもを育てる事が出来るのは、その母親だけなのですから、私たちが出来る事とさえ、その母親を保護する事だけです。

そうすると、これが私達

の、中絶賛成/中絶反対運動の議題の中心となるはずです：子どもと母親の一番の利益は、常に同じです。私達は両者を救う事によって、一人一人をもベストに救えるのです。もしどちらかを傷つけなければ、両者を傷つける事になります。

私達中絶反対運動の最終目的は、この社会がこの事実を理解するように導く事です。そうするには、中絶賛成運動と逆の事をする必要があります。その中絶賛成運動は、母親と胎内の子どもとの利益を別々にした社会の見方の中で生まれました。もし彼等の利害が別々だとすれば、女性の権利と胎内の子ども

の権利との間には、どちらかが勝つであろう衝突が有り得るでしょう。私達はそんな理屈の少しいだって、受け入れる事は出来ません。私達は中絶の争点を、母親対子どもと作り上げてしまつようなイデオロギーと戦わなければなりません。私達は、女性の権利も子どもの命も、支持します。母親もその子どもも助ける事が出来る、又そうすべきだと信じます。中絶が合法化された事が益をもたらすのは、女性の権利ではなく、墮胎手術者や危機にある女性を利用しようとする他の人々です。私達の目的である女性の権利を助ける側面を再

度強調しましょう。上に挙げられた議題は、女性を保護し、又子どもの命を救います。それは中絶が「安全」だという誤った通念を打破し、中絶のために女性におこる危険性について社会を教育します。女性にとっての中絶の危険性がきちんと理解されて初めて、大勢の人が、子どもを守る責任を受け入れる心と精神を開くのです。

Elliot Institute-95